

---

# さくらの花咲くころ

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さくらの花咲くころ

### 【Nコード】

N0696L

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

3月も終わりに差し掛かった日曜の昼下がり。妻の『桜が見たい』という一言で急遽出かけた小旅行。

まさかその提案は、実は最初から仕組まれていたことなんて、今の彼にはわからなかった。

カップリングは新志です。

私が哀ちゃんメイン小説を書かせていただいていたCandlelight閉鎖に伴い、移行短編小説です。

3月も終わりに差し掛かったとある日曜日の昼下がり。

薄紅色の桜が舞い散る中、境内へ続く階段を、俺たちはゆっくり下っていく。

「大丈夫か？」なんていいながら、一歩遅れて歩く彼女の腰を軽く支える。

小学生の姿で出会ったあの頃には考えられない未来だったけれど、それが何よりも心地よく幸せな一時であったりして。

けれど、此処にくる前よりも、今の方が量りきれないほどに気持ちが高まっているのは、これほどまでに俺の中で幸せが満ち満ちているのは、この壮観な景色と、彼女の姉が話してくれた思い出を俺に聞かせてくれたからだだろうか。それとも、彼女の俺に向けたとある告白を聞いたからか。

いや、きっとそれは両方であって。

俺は幸せを噛み締めながら、今来た場所を振り返る。

頭上には、枝垂れ桜が寺社の総門の向こうから飛び出していて。まるで2人が出て行くのを見送っているかのような、今ではそんな錯覚にさえ覚えていた。

「また、来るから」

その桜咲き誇る寺社に一言声をかけて、またゆっくり歩き出す。だからそれまで、待っていて。

幸せは、ここに。

微かな桜の花弁がまたひとつ、ひらひらと空から地上に舞い降り

た。

目の前に落ちてきたそれは、きっとここにいる天神様が俺たちにくれた

ひとつひとつの贈り物だったかのように思えて。

俺は、大きく手を伸ばして、それを掴んだ。

さくらの花咲く頃

突然連れて行って欲しいところがあるの、なんて言われて驚いた。

『桜を見に行きたいの』。

それは俺にしてみれば本当に唐突で、ただの気紛れかとは思ってみたけれど、それでも彼女は滅多に自分から何かを頼みこむ女じゃないのはわかっていたから、その些細な願いを聞いてやることにした。聞いてみればその場所は、自宅からは微妙に遠く、とりわけ桜の名所とテレビで取り沙汰されているわけでもない場所。一体何を考えているんだろうなんて思いは一向に消えぬままで。

車を走らせて郊外を抜ける。隣には外出するのが嬉しいのか、それとも自分の思いが通ったのが嬉しいのか、とにかくいつもより格別機嫌のよさそうな妻。

東京から離れてすでに2時間半。あたりは山や畑や果樹園、そして民家が沢山あって。高層ビルの陰も形もない。目的地はとある山

奥にあると言い、正確な場所を尋ねたら、きっとカーナビにも載っていないんじゃない？と涼しげな顔で返されたときは心底驚いたが、それでも妻である志保が楽しそうにしているんだったらそれもまたいいだろうとも考えた。貴重な時間を割いてしまつて悪いわね。なんて、彼女らしからぬ言葉も聴けてちよつと心が弾んだりして。けれど、そんなことで喜んでゐる時間もすぐに終わつてしまう。

気がつけば山の中。昔聞いたという山の名前を頼りにここまで来たけれど、それ以上のことは手元の地図もカーナビも示すことがなくて。隣にいるナビゲーターだけを頼りに行つたりきたり。文句を言つたり言われたり。気が付けば道すらなくなつていき、その中で車を走らせる。どこまで走つても鬱蒼とした茂みの中、俺は目的の場所に自分たちが本当に辿りつけるのか、少しの不安が頭の中で取り巻いていた。こうやってヤキモキしているのは自分だけだと理解つてはいた。しかし・・・。

隣で少しも動揺を見せず、カーオーディオから流れる音楽を心地よさそうに傾聴する彼女を尻目に、俺は小さく溜息をついた。

+++

「ここだわ・・・、多分」

山の奥地まで進んだ場所。茂みから開放されてようやく抜けた道。『多分』という言葉がついて出てくるのは少し気にかかったけれど、彼女の言葉で車を止めると、目の前には50、60段ほど続く階段が現れた。見上げれば総門の両脇に枝垂れ桜の大木が寺社を覆っていた。それはたいそう立派な大木で、見るものを圧倒させる。樹齢50年、60年は経っているのではないかというとても大きな枝垂れ桜。

「凄いな・・・」

「そうでしょ？奥にはもつと大きな桜があるのよ、行きましょ」  
「・・・ちよっ・・・。行きましょって、おまつ・・・」

軽やかに階段を上る志保に続いて、俺も慌てて追いかける。何をそんなに急いでいるのか、何をそんなに楽しそうにしているのか、皆目見当がつかなかった。こんなに自分自身のためにアクティブに動くことなんて、今まで一度足りとてあつたことだろうか。何が彼女をこんなにも変えさせているのか。ここは、たまの旦那の仕事休みを削って足にさせてまで行きたいと思う場所なのだろうか。それほどまで、自分の知らない大切な思い出をこの場所に抱えているのだろうか。

それなら一体、いつ、誰と？

気がつけば頭の中には彼女に対しての詮索心がいっぱいになっていく。

「・・・なあ、志保」

あつという間に追いつき、既に自分の一歩後ろを歩く彼女に向けて俺は直球でその疑問をぶつけた。

「・・・そろそろ教えてくれてもいいんじゃないか？いったいどうして此処までこの場所に拘つたのか。・・・こんな人里離れた場所をまさか花見をするために選んだ、とかそういうのじゃないんだろ？」

一体この場所には何があるのか。

俺の詰問染みたその言葉に、志保は小さく微笑する。

「上に着いたらね」

夫である自分にさえ、滅多に見せないとびっきりの笑顔。しかも膝よりもはるかに長い白いレースのスカートをふわりと靡かせて。

普段ならそれはきつとホントにドキドキするほど嬉しいことなんだろうけど、今のこの状況でそんな力才を見せられると、その笑みに裏があるんじゃないか、なんて勘ぐってしまう。その微笑が、その一言が、俺の中で湧き上がる焦りを俄か上昇させていくことを、彼女は気づいているのだろうか。

今では彼女は自分のモノになっっているはずなのに、それでも感じてしまう嫉妬心。その感情は、数年前のあのときと 別の女性を想うばかりに抱いていた感情と、少しも変わることがない。

成長しない自分の気持ちに辟易した部分を感じつつ、一方でそんな自分の反応を楽しんで見える彼女に対しても苛立ちを隠せずにした。

+++

階段を上りきると、総門の向こうからが見渡せた。総門から見えていた枝垂れ桜だけだと思っていたのだが実はそうではなかったことを知る。見渡せば総門から、30メートルほど離れた山門、そしてそれを通って本道までの道も両脇に植えられた枝垂れ桜。あまりに見事に咲き誇っている桜に、俺は一瞬で心を奪われた。今までのこの、どうしようもない胸の苛立ちは一体何処へ行っただ、なんて思わずそんな自分に呆れてしまうくらいに。それでも鼻腔いっぱい香るほのかな桜の香りに、俺は無意識に胸いっぱい吸い込んでいた。

「どう？ 気に入った？」

背後から聞こえた志保の声に振り返ると、ようやく階段を上がり終えた彼女は嬉しそうに笑みを見せた。

「なかなかの穴場でしょ。こんな山奥まで来る人なんて、最近地元の人でさえなかなかいないのよ。こんなに綺麗に植えられて。こんなに愛されているのに。空気も美味しいし、静かだし。・・・なんだか勿体無いわよね」

「・・・そうだな」

風に靡かれ、志保の緋色の髪は優しくそよそよと揺れていた。何枚かの桜の花弁が揺れたその髪に纏わりついているのを目にして、

俺は不覚にもそこでドキリとしてしまう。そうやって彼女に聞き返すいろんな質問の鼻先はまたもや削られてしまったわけだ。

「・・・ここね、お姉ちゃんと一度だけ来たことがあるのよ」

本堂へと続く道を歩きながら、俺の隣で、突然ぼつり、志保が呟いた。突如彼女が呟いた予想外なその名前に驚いた。まさかここですべて彼女の名前が出てくるとは思わなかったから。

「16のとき、おねえちゃんに連れられて。組織の監視下によるものだったけれど、何もこんなところまで連れて行かなくてもって私も思ってたわ」

『私も』という言葉をやんわりとだが強調し、ちらり、と俺に目を遣って意味深に微笑する。そんな視線に俺は思わず苦笑した。

「今のあなたと同じように。『桜を見に行こう』って誘われて。逢うのがすごく限られてるんだから、何もこんな山奥まで連れて行かなくてもいいのに、って思った」

『桜を見に行きましょう、志保』

明美さんの声がふと俺の耳に聞こえてきた。軽やかでとても楽しいげで。明るく妹に笑いかける姉の姿。

俺は遠い昔に、ほんの数日の期間関わった宮野明美の笑顔を思い浮かべ、妹に語りかけるその表情が簡単にイメージでき、口元をほころばせた。

「『ここはね、志保。私たちにとってとってもゆかりのある場所なのよ』」

「え？」

「・・・おねえちゃんが言ったの。この枝垂れ桜の下でね」

本堂へと続く道にあるたったほかの桜よりも少しだけ大きな木の下で、木肌を触りながら志保は呟いた。



「昔ね、ここらへんに研究所があつたときに、お父さんとお母さんがよく花見に訪れたって言ってたわ。そしてプロポーズをした場所でもある」

「・・・へえ」

「この桜の木の下でおねえちゃんは嬉しそうに話してくれた。『ここが私たちの原点なのよ』って」

「ふうん・・・」

桜の木の下で、両親の話を楽しそうに話す姉。あのころの志保は一体どんな思いで聞いていたのだろう、とふと考えてしまう。あのころは志保に対するご両親の心なんてきつと伝わりきれてないときだったと思うから。

散り行く桜を見上げながら、懐かしそうに木肌を撫でる志保に、俺は無意識にそつと手を伸ばし、彼女の細い腕に触れようとした。彼女もそれに気づき、はにかんだ笑いを見せると、徐に手を伸ばし、その細い指先で俺の骨太いごつごつした指を絡め取る。

「・・・だからもう一度来たかったのよ。貴方にも来てもらいたかった。・・・そして貴方に伝えておきたいことがあつて」

「・・・俺に？」

「そう」

志保はにっこり微笑んで、お腹をそつと撫でて上目遣いで俺を見た。

「・・・まさか」

こくりと小さく頷いて、恥ずかしそうに彼女は微笑した。

とつても幸せそうな、俺にとつて、女神のような力才をして。

「・・・っ！...！」

俺は思わず志保が腕の中でつぶれてしまふんじゃないかって思うくらい、力いっぱいぎゅつと彼女のことを抱きしめた。嬉しすぎて言葉にならなくて。何を言っているのかすらわからないほど興奮して。けれど、すぐに我に返って、慌てて抱きしめた力を弱めて。

そつとふわふわの緋色の髪を撫でながら、俺は小さく『ありがとう』と呟いて、彼女の額にキスをした。

+++

枝垂れ桜の舞い散る寺社を背に、ゆっくりゆっくりと階段を下る。掴んだ桜の花弁はきつと掌中でつぶれていて。相変わらず子供ね、なんて志保はくすくすと笑った。

「また、近いうちに来ような。・・・今度は子供も連れて、三人で」

「お父さんやお母さんのように思い出になるような話はここには私たちはないけれど」

「でも、俺はとっておきのものをもらったぜ。それに・・・何も話をしなくても、この桜を見るだけでもなんだか洗われる気持ちもしたしな。きつとここでまたいろんな俺やおめーの話が生まれるんじゃないか？おまえの姉さんがおまえをここに来てそんな話をしてくれたように」

「そうね・・・」

志保は俺の言葉に嬉しそうにふつと微笑んだ。

階段を下りながら頭の中にありありとその光景が浮かんでくる。

同じように枝垂れ桜の花弁が散るその中を、子供の手を引いて階段を上がっていく。それはとっても楽しげで、また軽やかで。それから時は流れ、小学生になった子供たちを連れて4人でゆっくりと上る光景。元気に駆け上がるわが子を見つめ、目を細め。時には娘や息子の恋愛相談なんて聞いたりして。いつかは子供たちも独立して、たとえば体が老いてきてぼろぼろになったとしても、夫婦手を取り、階段を上る、そんな光景。

時代が変わるように、また、上る人たちも変わって行く。きっと俺たちの子供も、また次の子供もこの場所に足を運んでくれるだろう、この桜がある限り。

だっていつもそこには変わらぬ、慈愛に満ちた神の両手いっぱい広げた手のように枝垂れ桜が俺たちを包み込み、そして見守ってくれているから。

だから。

『いつてらっしゃい』

背中では誰かの声がした。そう投げかけられた背中では、曇りだといふのに、とってもあったかかった。

（後書き）

2007年度宮野の日作品です。

ギリギリまで唸っていた、産物がコレです（笑）

サクラの花にちなんだ春らしい話にしたかったのですが、うまく仕上げる事ができたかな。

以前、素敵哀ちゃんサイトさんに贈呈した哀ちゃん結婚話の続編となっています。

神社とかつてよくサクラの木がいっぱい生えてて。

私もよく春の散歩コースで通ったりするのですが。

そんなイメージを、この作品に向けました。

こんななんだたらさらにいいだろうな、ってね。

高い階段を上って、そこで迎える沢山のサクラの木。

それはとっておきの穴場で、二人にとって秘密の場所。

それを新ちゃんに教えることでまた絆が生まれたら。そして新たな

関係が生まれたら・・・。

そう願いながら作りました。

いつまでもそんな関係が続きますように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0696l/>

---

さくらの花咲くころ

2010年10月10日15時41分発行